

(3) 受賞者



梅棹 忠夫 博士

国立民族学博物館顧問，京都大学名誉教授

卓越した研究・実践活動により情報化の歴史的意義や産業的価値を明確にして情報化社会の発展をもたらした先導的貢献

略歴と主な業績

■梅棹忠夫博士は1920年6月13日に京都市に生まれ、1943年に京都大学理学部を卒業された。1949年大阪市立大学理工学部助教授、1965年京都大学人文科学研究所助教授、1969年同教授、1974年に国立民族学博物館館長に就任され、1993年に同館を退官された。現在は同館顧問及び名誉教授、京都大学名誉教授であられる。

■大学では主として動物生態学を専攻されたが、1944～45年の内蒙古の学術調査、及び1955年のカラコラム・ヒンズークシ学術探検を通じて民族学、比較文明学に転じられた。1957年に発表された論文「文明の生態史観」では、サクセッション（遷移）という生態学の概念を用いて人類文明史を説明され、西欧文明と日本文明が互いに影響しあいつみで進化したという「平行進化説」をうちだして新しい世界モデルを示された。1957年以降は、東南アジア、東アフリカ、ヨーロッパなどでフィールド・ワークを精力的に行われ、民族学的調査と研究を継続されていたが、一方で「動物の社会的干涉」をテーマに、オタマジャクシの群を観察し、個体が相互に影響しあっていることを数理的に解析して理学博士の学位を取得された。動物数理社会学の誕生である。動物たちは明らかに感覚器官によって他の個体の存在を情報として認知しているのである。博士はすでにその頃から情報の問題に足を踏み入れておられた。

■1960年頃の日本は民間放送の勃興期であった。博士は民間放送の人たちとさまざまな交渉を続けられ、放送という社会現象に深い興味を持たれた。そして単に放送だけではなく、各種のメディアを通じて流れる「情報」一般について考えるようになった。オタマジャクシとマス・メディアでは一見距離がありすぎるようにみえるが、感覚器官による情報の捕捉という点では、生物学的にみれば両者は同じことなのだ。博士の情報論の基盤には明らかに生物学のささがある。

■論文「情報産業論」は1962年秋に執筆され、翌年、朝日放送の広報誌『放送朝日』の1月号に発表された。そこにも動物発生学における基本概念が転用されており、人間の歴史が産業発展の歴史として捉えられ、情報をめぐる文明学が展開されている。博士は情報産業の時代の到来と展開を予言され、それを農業社会・工業社会のあとに続く新しい社会と位置づけられた。この論文はただちに『中央公論』3月号に掲載されて広く読まれることとなり、大きな反響を呼んだ。この種の論議は、当時まだ世界のどこにも行われていなかったものであり、情報のもたらす文明の変革を予想した点で博士は世界の誰よりも早かった。その後、世界は確実に情報化の進展をみて、今日の情報化社会を迎えるに至った。「放送人」「情報産業」という言葉は今でもこ普通に使われているが、これらも博士の造語であり、いずれも1961年および1963年の『放送朝日』において初めて使われた。

■情報の問題はしばしばコミュニケーション論の枠内でとらえられるが、博士の情報論はコミュニケーション論ではない。それはむしろ博士の実践的な体験の中から生まれた世界認識の一方法なのである。「文明の生態史観」では世界の諸文明の空間論とその地理的展望を、また「情報産業論」では人類文明の歴史的展望を考察しており、これらの「文明の生態史観」と「情報産業論」は梅棹文明学の縦軸と横軸をなしている。

■梅棹博士は日本民族学界の悲願であった国立民族学博物館の創設に尽力され、創設準備室長を経て、初代館長に就任された。博

士によれば、博物館は情報産業の一種である。博士は約20年間、館長としてその運営にあたられ、個人としては永年にわたって情報の生産と処理を行われた。それらの経験を整理して記述したのが『知的生産の技術』をはじめとする情報論の一連の著作である。

「知的生産の技術」と「情報論」は一見別物に見えるが、両者は本質的なところで深くつながっている。「知的生産の技術」は情報をめぐるフィールド・ワークの方法論であり、博士の現場体験に基づいたものである。

■博士は常に自由な発想から独創的な思想を展開されてきた。また博士の論文や著書は長年月、広範囲にわたり数多く引用されており、今日の情報産業の隆盛を見ると、博士の思想の先見性と影響力の深さを知ることができるであろう。

■梅棹博士の研究分野は生態学、民族学、比較文明学、情報論のほか、国際交流論、日本文化論、日本語論、探検論、文化開発論、研究経営論などじつに多岐にわたっている。その著書の大半は『梅棹忠夫著作集』（全22巻 別巻1）に収録されている。

情報論に関連する論文

- | | |
|-------|--|
| 1957年 | 「文明の生態史観序説」
『中央公論』2月号、pp.32～49、中央公論社 |
| 1961年 | 「放送人、偉大なるアマチュア
——この新しい職業集団の人間学的考察」
『放送朝日』10月号、pp.8～15、朝日放送 |
| 1963年 | 「情報産業論——きたるべき外胚葉産業時代への夜明け」
（『放送朝日』1月号、pp.4～17、朝日放送） |

主要著書

- | | |
|----------|---|
| 1956年 | 『モゴール族探検記』（岩波書店） |
| 1964年 | 『東南アジア紀行』（中央公論社） |
| 1967年 | 『文明の生態史観』（中央公論社） |
| 1969年 | 『知的生産の技術』（岩波書店） |
| 1974年 | 『地球時代の日本人』（中央公論社） |
| 1976年 | 『狩猟と遊牧の世界』（講談社） |
| 1986年 | 『日本とは何か——近代日本文明の形成と発展』
（日本放送出版協会） |
| 1987年 | 『メディアとしての博物館』（平凡社）
※情報論の実践篇 |
| 1988年 | 『情報の文明学』（中央公論社）※情報論の理論篇 |
| 1989年 | 『情報論ノート——編集・展示・デザイン……』
（中央公論社）※情報論の応用篇 |
| 1989年 | 『情報の家政学』（ドメス出版） |
| 1989～94年 | 『梅棹忠夫著作集』（中央公論社） |
| 1990年 | 『情報管理論』（岩波書店） |
| 2000年 | 『近代世界における日本文明——比較文明学研究』
（中央公論新社） |
| 2002年 | 『行為と妄想——わたしの履歴書』（中央公論新社） |

主な受賞など

- | | |
|-----------|----------------------------|
| 1988年 1月 | 朝日賞 |
| 1988年 4月 | フランス共和国パルム・アカデミック勲章コマンドール章 |
| 1988年 5月 | 紫綬褒章 |
| 1990年 10月 | 国際交流基金賞 |
| 1991年 11月 | 文化功勞者 |
| 1994年 11月 | 文化勲章 |
| 1999年 11月 | 勲一等瑞宝章 |



エズガー W. ダイクストラ 博士

米国テキサス州立大学オースチン校名誉教授

ソフトウェア基礎理論、プログラミング方法論、構造化プログラミング、セマフォなどの独創的研究によりコンピュータソフトウェアの科学的基礎を確立した先駆的貢献

略歴と主な業績

■ダイクストラ博士は1930年5月11日にオランダのロッテルダムに、化学者の父と数学者の母との間に生まれた。博士は1948年にロッテルダムのエラスムス・ギムナジウムを卒業され、1956年にライデン大学より数学と理論物理学の学士号を、また1959年にアムステルダム大学よりコンピュータサイエンスのPh.D.を取得された。博士は1952年から1962年までアムステルダムの数学センターにプログラマーとして勤務され、1962年から1984年までアイントホーフェン工科大学の数学科教授を務められた。またその間1973年から1984年まで米国バロース社のリサーチフェローを兼務された。博士は、1984年から1999年まで米国テキサス州立大学オースチン校のコンピュータサイエンス学科のシランパーガー100周年記念寄附講座教授に就任され、1999年に同大を退官して名誉教授になられた。

■博士は数理論理こそが正しいコンピュータ・プログラミング構造の基礎であることを洞察され、また、数学的方法論の確立に貢献されたことは有名である。博士は、OSを明確に同期的逐次処理として構築する思想、コンピュータ・プログラムの形式的開発、そして非決定性の自律的制御に関する知的基礎論などの創始者であられる。博士が極めて効率的な最短経路アルゴリズムを確立されたこと、最初のAlgol 60コンパイラの設計やコーディングを行われたことは有名である。博士はプログラム作成に際し、GOTO文を廃止すべきであるとの運動の指導者としても有名である。

■博士は構造化プログラミングや、関心の分離、同期化、デッドロック、ダイニング・フィロソファの問題、最も弱い前提条件、ガード付きコマンド、排除的奇蹟、そして制御コンピュータプロセス用の有名なセマフォなど、多くの概念や語句によってコンピュータリングに関する言語を豊かにされた。Oxford English Dictionaryのコンピュータリングの文脈には、“vector”や“stack”などの単語の博士の使い方が引用されている。

■博士の機知、雄弁、言葉の使い方の見事さはつとに有名であり、その実例は、“コンピュータが考えることができるかどうかという質問は、潜水艦が泳げるかどうかという質問と似ています”とか、研究テーマをどのようにして見つけたらよいかという将来性のある研究者の質問に対する博士のアドバイス“あなたがただができることだけをやりなさい”とか、また、チューリング賞受賞式における“コンピュータは、1つの道具としての能力においては、私たちの文化の表面に生じた1つの波紋にすぎないでしょうが、その知的挑戦の能力においては、人類文化史上かつて無かったものです”などによって知ることができる。

■博士は科学者として、商業的・経営的・政治的配慮に煩わされることのない科学的厳格さで至高の学問的理想を述べられ、また追求された。平易さ、美しさ、そして流ちょうさが博士の持ち味であり、

プログラミングや数学の正確さに対する博士の妥協を許さない主張は多くの人にインスピレーションを与えた。博士は自分の仕事を最高基準によって評価し、多くの友人にも同じやり方を求められた。その他、博士はあえてソクラテスの役割、すなわち社会に対して口うるさい人の役割を演じられた。博士は、はやりの考え方にありがちな間違いや、日和見的な妥協の危険性を指摘することによって、周囲の人や地域に対して警鐘を鳴らされた。博士の最も重要な遺産は、ソクラテスと同じように、小グループ討論会や学問的やりとりによって、半ば公式化したアイディアや新たに発生する発見などについて、博士とかかわりを持った人達である。特に選ばれた集団は、“木曜の午後のクラブ”として知られているオランダのアイントホーフェンや米国オースチンにおける博士主催の読書会に出席した人達である。

■博士は並外れた著述家であった。博士の1,300件余りの全業績はデジタル化されており、<http://www.cs.utexas.edu/users/EDW> でアクセスすることができる。博士は長年にわたっていつも数百人の友人や同僚と文通されており、それは電子メールでなく通常の郵便を通じてであった。博士は学術論文や手紙を書くときは、コンピュータよりもとりわけ万年筆を好まれた。

■博士は愛用のベーゼンドルファーのグランドピアノで友人達にモーツァルトを演奏して楽しまれた。博士とMaria C. Dijkstra-Debets夫人はTouringをもじって“Turing Machine”と名付けられたフォルクスワーゲンの愛車で米国内や国立公園巡りを楽しまれ、その車の中で、後にEDWsと呼ばれる多くの論文を書かれた。

■博士は、オランダのNuenenの自宅で最後の6ヶ月間を過ごされ、C&C賞の受賞通知を受けられて2週間後の2002年8月6日に、ガンによる闘病生活を終えられた。

主な受賞など

■ダイクストラ博士は1971年に米国計算機学会(ACM)よりProgramming Systems and Languages Paper Awardを受賞された。博士は1972年にコンピュータ分野のノーベル賞といわれるACMチューリング賞を、1974年にAFIPS Harry Goode記念賞、1982年にIEEE Computer Pioneer Award、そして1989年にコンピュータ科学教育に対する貢献が認められてACM/SIGCSE Awardを受賞された。2002年にはACM Conferences on the Principles of Distributed ComputingよりInfluential Paper Awardを受賞された。

■博士は1971年にオランダ王立芸術・科学アカデミー会員と英国コンピュータ協会名誉フェローに、そして1975年に米国芸術・科学アカデミーの外国人名誉会員に選ばれた。1976年には英国ベルファスト・クイーンズ大学より名誉学位を、2001年にはギリシャのアテネ経済ビジネス大学より名誉博士号を授与された。